

小樽高商における年史編纂の試み

——「緑丘学園三十五年史」を中心に——

荻 野 富 士 夫

はじめに

二〇一一年の本学創立百周年に向けて『百年史』編纂を本格的に準備するにあたり、参照すべきものとして『緑丘五十年史』と「緑丘学園三十五年史」稿本がある。数多くの大学史のなかでも定評のある『緑丘五十年史』編纂の特質・意義については別の機会に譲り、ここでは稿本として残る「緑丘学園三十五年史」について、その編纂の経緯や意義について考えてみたい。「緑丘学園三十五年史」は未完に終わるが、その前史として節目ごとに浮上した年史構想も合わせて検証する。

一 年史編纂の諸構想

1 創立一〇周年の「沿革略」

一九二一年五月五日、小樽高等商業学校は創立一〇周年を迎えた。欧米出張から帰国したばかりの渡辺龍聖校長は、「本校は地理気候等の関係より本土の居住者よりは異域の如くに恣意せられ、之が経営につきては事不利益の諸点多かりしも、十年間諸事順調に運び、年々歩歩進歩発達して」きたと述べる。まもなく名古屋高等商業学校新設のために小樽を去る渡辺校長には一〇年を一区切りとして学校の基礎を築いたという自負と安堵の思いがあったはずだが、小樽高商自体としては過去の一〇年を振りかえる気運はなく、将来に向けての新たな発展の方向が模索されていた。渡辺校長の式辞も、「本校をして「専門学校らしくあり専門学校らしくあらせたし」とは余が十年一貫して把持せる所の方針なり」として、大学昇格運動とは一線を画す意義を強調しつつ、「小樽の未来は香し、多望多幸也、小樽にある我校の将来は誉あるべし。我校の位置は高し、実備はるの時其名も高かるべし」と、将来を見据えていた（渡辺『乾甫式辞集』）。『小樽新聞』で「高商開校記念式」として短く報道されるように（二一年五月六日付）、簡素な記念式典の実施にとどまった。

このとき、校友会の『校友会々誌』第二号（一九二一年七月）が「十周年紀年号」として編集刊行されているが、そこでも過去はほとんど語られていない。わずかに、五頁ほどの「本校沿革略」が創立以来の足跡を記している。文末に「室谷生」とあり、編集部員室谷次郎の執筆とみ

られる。「本校は創立未だ古からず」と始まるこの「本校沿革略」の記載は、各年度に発行される『小樽高等商業学校一覧』の「沿革略」にもとづいているが、ところどころに教職員や施設の整備拡充、学生の勉学や生活の充実ぶり、卒業生への期待が叙述される。「創立以来常に少壮気鋭にして有為の学者を集めて毎年数名を欧学せしめて各其学を専心研鑽せしめて其大成を図れり」や、「本校にて他に卒先備へたる企業実践商工管理の実際的運用」——「実践工場」設置（一九二〇年九月）による「石鹼製造」で、「其製品は既に市販に供せんとするの域に達せり」——などのように、一〇年間で培ってきた特色にも注目している。最後は、「創業の事漸く其終り、内基礎の愈確固たると共に将来に学界に雄飛し、実業界に有能の士を送り大いに貢献すある所らんとす」と結ばれる。そこでは「創業」の基礎はできたとして、やはり眼差しは前をのみ向いている。

なお、一九二六年には、現在につづく学術研究の発表機関として『商学討究』が創立一五周年を記念して発刊された。

2 『緑丘』「廿周年記念特輯号」

一九三一年の創立二〇周年では年史の編纂こそなされなかったが、さまざまな記念事業が実施され、それらは学生新聞『緑丘』第五七号（三一年一〇月三〇日付）で詳細に報じられている。『緑丘』第五七号自体が「廿周年記念特輯号」として、通常の倍の八頁建で編集された。一世代に近い二〇年を経過し、小樽高商にも祝意が満ちるとともに、創立以来の軌跡を振りかえる余裕が生れた。そして、将来に向けて過去を自省する必要にも迫られたのである。



『緑丘』第五七号 第二面

一〇月四日から六日までの三日間を記念祭とした。四日午前の新講堂における記念式は「時節柄内祝として職員、生徒及卒業生の水入らずの会合」（「時節柄」とは「一般社会の深刻なる不景気」に配慮したもので、「精神的に盛大に」というスローガンで実施された〔『緑丘』第五六号、九月二〇日付〕）となり、まず伴房次郎校長が「廿年間の創業の時代より生長の時代と発展して来た学園の歩み」を述べ、苦米地英俊の「創業当時の回顧談」があった（苦米地は『緑丘』第五七号と第五八号に「思ひ出づる事共」を寄稿している）。第一日目の夜の「音楽と映画の会」は「満員その数一千名稀に見る盛会」で、ハーモニカ部・マンドリン部などの演奏のほか、スキー部員の「シーシュプール」などが上映された。一日目と二日目の午後は「学校公開」となり、一般市民向けに図書館では書庫公開や「稀観書天覧」がおこなわれるほか、商品館や実践室が人気を呼んだ。高商石鹼の特売場も設けられた。

記念祭第二日目と第三日目の午前は記念講演会で、慶大教授小泉信三が両日「近世社会思想評論」を講演するほか、室谷賢治郎と手塚寿郎も演壇に立った。三日目午後には校庭で園遊会も開

かれた。十一月一三日と一四日には「特に創立二十周年記念祝賀の意」を込めて「外語劇大会」が開催され、多くの市民の観覧をえて大盛況となった。

また、創立二〇周年の記念事業として、『商学討究』第六卷中冊（三一年一〇月刊）が「創立廿年記念論文集」として刊行された。伴校長の「序文」には、「学識徳操共に高く、深謀遠慮兼ね備へらるゝ渡辺前校長が心血を濺ぐこと十年、荒蕪の原野を開拓して、創業播種せられたる苦節の後を受けて、妄りに守成耕耘の重責を負ひ、早くも又更に十年を閲みした」とある。伴校長の運営方針は「先任者の籌策を継承し、前緒を纂就」というものであり、二〇年を経て、「北門枢要の商都に於ける実業専門学府の声価は、世の斉しく認める所」というのは、おおよそ正当な評価だろう。

『緑丘』編集部で募集していた「記念懸賞論文」には八編の応募があり、南亮三郎・大野純一・室谷による審査の結果、白川友正「箱館通貨の一考察」が一等となり、『緑丘』第五七号に掲載された。同時に募集された「校歌」には数編の応募があったものの、該当作品はなしとされ、新たにコロムビア専属の作詞家時雨音羽に依頼することになる（これが現在の校歌となる）。

第五七号の「廿周年記念特輯号」は六面にわたって二〇周年関連の記事を並べる。第二面には上部に「創立廿年を迎えた学園の全景」の写真を掲げ、「学究の殿堂として 斯界に雄飛する」という見出しのもと、「廿年前に点ぜられた学燈の光は今や学界に燦然と輝くに到つておる」と述べる。教授陣の充実とともに、卒業生の各界での活躍に触れ、「今や過去への一線を画して目覚しい発展の時の近づきつゝあるのが感じられる」という。注目すべきは、その「発展」の方向として、「学生の自主的な、そして分科的な研究団体の確立及び積極的な研究発表によつて研究の分野を拡大し学園のレベルを高めていくべき」と提言することである。

「過去への一線を画して」ということは、第三面の論説「回顧より未来へ」でも繰り返される。



『緑丘』第五七号 第三面「論説」

「如何に回顧するかが最も大切な事柄」とするのは、「学園の過去は只管に上向的發展の一路を辿つて来た」ものの、「学園の現実」はその發展の歩みをもはや止めてしまったという認識を踏まえ、「論理的必然性をもてる学園の存在」を模索しようとするからである。それは「真理の為の真理を追求する殿堂」として措定される。この観点から二〇年を「回顧」したとき、「現実」は「真理の殿堂としての学園も今は何等の清新さを持たない」と冷厳にとらえられる。そして、「現在の批判が鋭ければ鋭い程、よりはつきりと未来へのみちを求め得る」とつづけるように、創立二〇周年の「回顧」を現状の「停滞」打破の契機としようとしているのである。

こうした見方が校長や教職員にも共有されていたのかどうかは不明ながら、学生のなかから「本校学芸研究機関の現状と将来の展望」についての真剣な検討がなされ、「真理の為の真理を追求す

る殿堂」が希求されようとしたことは大いに注目される。「廿年間の創業の時代より生長の時代と発展して来た学園の歩み」(伴校長)を肯定的に評価しながらも、それに安住することなく、現状の「停滞」を客観的に把握し、「歴史的必然性をもてる存在」から「論理的必然性をもてる学園の存在」へと脱皮と飛躍を図ろうとしているのである。なお、同号には卒業生板垣与一の「回顧より展望へ」も寄稿され、先の論説とほぼ同じ趣旨が展開されている。「はたちの年は飛躍の年だ。現実の正視を跳躍板として。力一ぱい反身になつて(内在的回顧)思ひ切り上下に踏み鳴らして(現実の正視)勇敢に企図の世界(超越的展望)へ飛び込め—祝福の光を満身に浴びながら」と。

3 「緑丘学園創立二十五周年史」の構想

一九三六年五月一五日付の『緑丘』第九三号は、「学園躍進の秋 廿五周年記念事業大綱 決定近し」という見出しで、七月五日からの記念事業の概要を報じている。創立二〇周年が「時節柄内祝」として控えめに実施されたのに対して、二五周年は「単なるお祭騒ぎ的記念事業に墮するを避け学園の歴史を祝ふと共に今や勃々として燃ゆる学園飛躍の気運を益々増長せしむる有意義なる催しをなすべく」として企画された。そのなかの「記念出版物」として、『商学討究』記念号



『緑丘』第九三号

のほかに、七月五日の記念式典当日に「緑丘学園創立二十五周年史」と『緑丘』の「特輯」および「回顧録」の刊行が予定された。手塚寿郎を委員長に、卜部岩太郎・糸魚川祐三郎・大野・南・室谷・中野清一を委員とする記念出版委員会の担当である。

ただし、この前後の『緑丘』を見る限り、「緑丘学園創立二十五周年史」に関する記事は見当たらず、実際に記念式典当日の七月五日にも刊行され

ず、企画のみに終わった。「二十五周年史」編纂においてどのような構想が立てられ、史料収集などでどこまでの進捗があったのか一切不明だが、刊行に至らなかった最大の理由は時間的な準備不足と思われる。推測を重ねれば、学校当局において、創立二五周年にあたり、年史の編纂刊行が不可欠というほどの差し迫った理由に乏しく、他の記念事業や『商学討究』記念号が優先されたといえよう。

それでも、「学園沈滞の声は久しい」(『緑丘』第九一号、三五年一二月五日付、「学生論壇」欄への寄稿を求める「告」という現状認識に立って、歴史的回顧を求める気運は高まりつつあった。特にそれは学生間に顕著で、『緑丘』第八七号(三五年五月一五日付)において、応援団長渡辺耕一は「建校の大理想を再認識して学園の永遠の生命の為に我々は何等かの形式に於て寄与する処なくてはならぬ」と檄を飛ばす。また、同号「緑丘展望」では新入生に向けて「我等が今学ぶその同じ場所で瞑想し思索した先輩の或者は燃ゆるが如き社会変革の情熱に殉じ或る者は磅礴たる

真理探究の十字軍に投げ又或者是活社会の推進的役割を果たしたことを憶へ！」と呼びかける。新聞『緑丘』自身が第九一号を創刊「拾周年記念特輯」として編集するのも、「静に過去を振り返り現在を批判して更に学園と共に無限の生命を有するであらう緑丘新聞将来への一前進基点を築く事」という意図からであった（なお、これに先だち、第八九号〔三五年七月五日付〕と第九〇号〔三五年一〇月一九日付〕に「緑丘新聞十年小史」を掲載する〔未完〕）。

『緑丘』第九四号（一九三六年七月五日付）は「創立式拾五周年記念特輯号」として一二頁建て発行された。苫米地英俊校長は、「創立式拾五周年を迎えて」と題する巻頭の文で、「この四分の一世紀を契機として清新宏大なる気分を以て学園の向上発展を企図してゐる」として「全校の奮起を切望するものである」とする。とりわけ「我が学園の一異彩」として「本校が画一を避けて、而も統一に就き、和衷協同、当校の使命に熱誠を傾け、独自の天分を守り、特異の本領を發揮してゐる」ことを強調するのは、秋に予定されている昭和天皇の行幸を念頭に置くからである。苫米地は『小樽高等商業学校創立二十五周年記念論文集』（三六年一二月刊）への序文において、「過去現在に、そして又将来に於ても、学園に繋がる此の一団が渾然融和し一大家族の如き情を懐いて、相携へ相助けて、各々の本務を通じて皇国に奉仕せんとせる団体精神」に特に触れ、それを「緑丘精神」と呼ぶ。

ただし、学生たちも「全校の奮起を切望するものである」とはいえ、その向うところは校長とはかなり異なる。「部説 二十五周年記念を迎えて」でも「緑丘精神」とは何かが問われる。そこで導かれるのは「学人の使命は常に社会の積極的メンバーたる事」であり、「青年から此積極性、進歩性而して此理想主義を剝奪する時緑丘は灰色となり学人は老化する」という。それは、先の『緑丘』第八七号の呼びかけと相通じる。ついで、「学園の特色」が次のように求められる。

茲に大なる特色として注目す可きは北海道なる土地と気候とから生ずる質実なる学風である。中央に比しカレントな研究に遅るゝ丈我々は健全なる研究を理論に献げ得るし又献ぐ可きであらう。又多年標榜されて来た語学に於ける特色は単なる就職の為であるばかりでなく、学生のインターナショナルな智識の源泉たる事に於て又我々の進む可き大特色でなければならぬ。

このような立論の背景には、「学園沈滞の声は久しい」という危機感の持続がある。第六面と第七面では「学園再認識論」という編集部の課題に応じた卜部・南・中野清一の三教員が寄稿している（実際の内容はそうはなっていないが）。『緑丘』第九六号（三六年十一月五日付）には、「学園の発展目指して 奮起せよ同輩 一、二年諸君に期待す」という記事が載る。

創立二〇年および二五年を契機として、停滞気味の現状打破の声が高まったといえる。しかもそれらが学生自身の要請であったことは注目に値する。

こうした気運は、「緑丘文化の父」とされる大西猪之介の顕彰としてもあらわれる。没後一五年を経て「胸像設置運動」がおこり、その第一歩として講演部主催の「故大西教授追憶 経済時局講演会」が開催されるのである。その際、大西は「北方文化の開発を以て自ら任ずる緑丘の歴史

に画期的な一エポックを描かれ、文化的諸活動の基礎を築かれし丘の誇り」と回顧される(『緑丘』第九八号、三七年二月七日付)。

大西顕彰も一波頭としつつ、創立二五周年を契機として学園の活性化の兆しが見えはじめる。文化運動の高調である。『緑丘』第九九号(三七年四月二九日付)は、「飛躍への契機」という見出しを立てて、「二十五周年記念は、先人のたどりつき積上げた歴史の反省と発展への基調とを与へたのである。昨年度その一端緒として文化意欲の具体化は、独立文化団体連合会となつて温床を破つた」と報じる。この前後の『緑丘』(三七年六月一九日付が創刊第一〇〇号となる)の論説欄・文芸欄は、学生の投稿を中心に精彩を放っている。その後、しばらく学生の中に「実に自由と進取の学園を作る意欲こそが、四半世紀の緑丘に流れる伝統」(『編輯後記』同、第一三二号、四〇年二月二五日付)という認識が継承されていた。

4 「緑丘三十年史」の試み

『緑丘』第一四七号(一九四一年五月二五日付)は、「創立三十周年を飾る 記念事業発表さる」として、「奉安殿及研究室建設」や「記念論文集の編纂」などとともに、「本校三十年史編纂」が決まったと報じた。「これは今までの記念事業中、新しい試みであり、期待されている、委員は卜部、大野、松尾、佐々木の諸教授」という。松尾はフランス語の松尾正路、佐々木は哲学・社会学の佐々木一義である。記念事業の実施にあたり、時局下ゆえに「最小限度、最も意義あるもののみ実施する」、その一つとして学校当局としても本腰を入れて臨むことになった。そして、同第一五一号(九月二五日付)には「緑丘三十年史の編輯は、爾来種々考案されて来たが、是れを機として各教授担当下に、研究編輯開始の予定」とある。この時点で、卜部岩太郎は第一線を退くことになっており(講師として授業は担当)、編纂委員から抜けたかもしれない。ただし、「緑丘三十年史」はこの時点では結実せず、実際には創立三五周年に向けた「緑丘三十五年史」として継続されていくことになる。

注目すべきは、この編纂においても、二〇周年や二五周年と同様に、学生からの働きかけがあったことである。以前の二度の場合と同じように、緑丘の沈滞を深刻に受けとめ、それを打開するために過去の軌跡に学び、刺激を受けようとする意図があった。この先頭に立ったのが、一九四〇年度の応援団長高田勇である。高田は『緑丘』編纂部主催の座談会「新年度の抱負を語る」で、応援団の綱領の一つについて次のように発言した(第一三四号、四〇年四月二五日付)。

私は緑丘史の必要を痛切に感じてゐるものです。現在は歴史の中の一ポイントに過ぎませんから、歴史の流れを知らずしては現在の自己の地位を知ることは出来ません。それで自分は緑丘史の必要を痛感してゐるのです。その緑丘史の中に真の緑丘精神といふものを見ることが出来ると思ひます。それで具体策ですが資料となるべき記録が至つて少いのです。それで我々ばかりで無く此の方面に才能ある者によつて作つて行きたいと思ひます。それには費用が入るので資料が集まり次第緑丘新聞に掲載するやうな方法を取りたいと思ひます。そうす

れば何時かは学校当局でも一冊の本に認めてくれることでせう。緑丘史のみならず各部に於ても部史があつた方が良いと思ひますが如何でせう。

高田は五月七日の応援団長推戴式でも、「今や我々は真に現実を凝視し、新しき批判的精神に立脚し毀誉褒貶に囚はれず内的統一真の平和発展に向つて邁進し以て緑丘の意気向上を積極的に計らねばならぬ。学生には学生としての覇気がある。我々こそ緑丘発展の礎とならねばならぬ」（『緑丘』第一三五号、四〇年五月二五日付）と熱く呼びかけていた。具体的には「応援団は総務部と共に校友会各部を後援して各部史を編纂せしめ」、創立三〇周年に向けて準備することになった（『緑丘』第一三七号、四〇年七月二五日付）。しかし、まもなく校友会は戦争遂行態勢の一環としての報国団に改組されることになり、この「校友会各部史」編纂はほとんど着手されなかつたようである。

日中戦争の長期化とともに小樽高商の教育研究にも戦時統制色が強まるなかで、「真に現実を凝視し、新しき批判的精神に立脚し」という学生の「緑丘精神」の理解は押しつぶされつつあった。「新体制」下、「生活の方向転換」を強いられ、「特権を奪はれた今日の学生は、今後、何を考へ、何に生活の弾力を求め、何を目標にして動いて行くことであらうか」（同、第一三九号、四〇年九月二五日付）という状況に陥るのである。高田団長の「緑丘史」編纂の提言は、「自由と進取の学園を作る意欲」の最後の表明であつたといえる。

この応援団の提言に対して学校当局も「大賛成」を示したものの、「緑丘史」編纂を通して学生側も学校側もともに希求しようとする「緑丘精神」の内実は異なつていた。学生側のそれは「実に自由と進取の学園を作る意欲こそが、四半世紀の緑丘に流れる伝統」という点にあるが、「教学錬成」一色に染まりつつある学校当局の考える「緑丘スピリット」とは「産業報国を基調とする質実剛健の美風、協同一致の大家族精神」（卜部「紀元二千六百一年の新学年を迎へて」『緑丘』第一四六号、四一年四月二五日付）というものであつた。

四一年一〇月一〇日におこなわれた創立三〇周年の記念式典でなされた苫米地校長の式辞の、「入りテハ知徳ノ研鑽ニ努メ出デテハ国防体制下ニ修練シ以テ皇運ヲ扶翼シ奉ルタメ日夜勇奮敢闘致シテ居リマス」（『緑丘』第一五二号、四一年一〇月二五日付）という部分には、対米英開戦を控えた緊迫感が満ちている（すでに在学生の卒業年限の繰上げが決定していた）。なお、『緑丘』第一五二号は、苫米地「緑丘学園 三十年の回顧」のほか、渡辺龍聖「創業の回顧」をはじめとする卒業生や元教員の「緑丘への回想」八編を掲載している。それらでは「思ひ出」や「想ひ出」がなつかしく語られており、かつてのように「過去への一線を画して」、「学園の現実」を冷徹に見つめるという気運はない。学校当局の年史編纂の目的は、苫米地校長のいう「本校教育ノ目標——「時勢ノ進運ニ応ジ、国体信念ノ確立ト人格陶冶ヲ経トシ、学理ノ實際化、地方化ヲ緯トシ、産業報国ニ帰結シ、以テ臣道ニ徹底シタ実業人タラシムベク錬成スルコト」——の再確認・確定に収斂していったといえよう。

5 他高商の年史編纂



高等商業学校の年史

こうした二五周年ないし三〇周年を期しての年史編纂の企画や構想を、他の高等商業学校の年史編纂と比較してみよう。官立の高等商業学校だけでも、第五高商としての小樽を挟んで一二校が設置されており、一九三〇年代にはいずれも一〇年から三〇年の区切りを迎えていた（すでに東京高商は東京商科大学へ〔一九二〇年〕、神戸高商は神戸商業大学へ〔一九二九年〕昇格していた）。

このうち、神戸高商では一九二八年に開校二五周年を記念して『筒台廿五年史』が刊行されている。これは「全き形に於ける丘の建設の記録たらしめむとし、傍ら懐しき姿に於ける丘の物語たらしめむ」という意図にもとづき、学生自身が発案し、編纂にあたったユニークな校史である（学友会内の筒台史編纂会による刊行）。小樽高商の学生たちも上述のように二〇周年・二五周年・三〇周年の節目に、「真に現実を凝視し、新しき批判的精神に立脚」することをめざして「緑丘史の必要」を叫んだわけだが、その先駆として実際に『筒台廿五年史』が編纂されていたのである。しかも、そこで貫かれる「吾等の先進は常に「自由」と「真摯」とを以てその生命となせり」（「序」）という「筒台精神」ともいべきものは、小樽の場合には「自由と進取の学園を作る意欲」=「緑丘精神」に相当する。学生が主体的に学園での勉学・生活を謳歌しようとするとき、それらの源泉としてこうした「精神」の喚起と強調がなされたのである。

もう一つ個性的な校史は、小樽高商について設立された名古屋高商の『剣陵十周年史』（一九三一年）である。同校の同窓会組織である其湛会の編纂になるもので、「将来より完全なる二十周年史・三十周年史発刊に到るまでの一基石」と位置づけられ、巻頭には渡辺龍聖校長の写真と「十年一日之思」という揮毫が掲げられている。「母校分課史」における「商品学教室」「商業実践教室」「能率実践工場」などの叙述は、小樽高商との比較のうえでも興味深い。

創立一〇年で早くも校史を編纂したのは、和歌山高商である。一九三三年刊行の『和歌山高商十年史』で、創立一〇周年の一年前から「編纂係委員」が任命され、編纂作業が急ピッチで進められた。「凡例」には「創立から現在に至る本校の歴史を編纂するの必要が感ぜられ」とあるが、その意図は校長花田大五郎の「努力を積み来つて或る時期に一たび回顧し、過去の業績を憶ひ、将来に向つて一段の努力心を喚起することは、倦怠を一掃し、意気を新にする所以でもある」という「序」において推測されうる。小樽高商の場合には、二〇周年を迎えるなかで現状の「停滞」を打破するために「緑丘史」の編纂が試みられようとしたわけだが、一〇年ほど創立の遅れた和歌山高商では現状の「倦怠」気運の一掃のために、創立時の初心などの「回顧」が必要とされたのだろう。さらに「国家非常時に当面して」という現状認識も加味されていた。

小樽に先行した長崎と山口の各高商では、創立三〇周年を期して校史編纂がおこなわれた。まず、長崎高商では一九三五年一〇月の祝賀式典に向けて、その春から編纂に着手し、『長崎高等商業学校三十年史』として刊行した。「今や而立の本校は、基礎益鞏固を加へて、前途の洋々測るべからざるものあるに至つた」（只見徹校長「序言」）とあるように、一つの到達点としての編纂である。「第一編に明治時代、第二編に大正時代、第三編に昭和時代、第四編に現況を筆叙」（「凡例」）し、各編を「概観・規定・施設・職員及び卒業生・雑記の六章」で構成するという内容もオーソドックスなものである。

山口高商の場合、その淵源は遠く藩学山口明倫館に発し、山口中学・山口高校という前史があったため、その一二〇年におよぶ「光輝ある歴史と特異なる沿革とを審かにし、教学継紹の事歴を明かにして、後に来る者に之を貽すべき責任」（岡本一郎校長「序」）という観点からの編纂となり、その完成には五年を要した。一九四〇年刊行となる『山口高等商業学校沿革史』は、千二百頁を越える大冊となった。「凡例」には「本校々制の淵源と変遷とを究明し、学規教則及教育方針を闡明すると共に、学園生活の全貌を考察して多年の伝統を明かならしめんとした」とあり、高商期は三期に分けて叙述される。その第三期は一九二六年以降の約一五年間であり、第一章で「支那科及貿易別科設置」というトピックを述べ、「皇室関係事項」「諸規則の改正」「教職員の任免及異動」「教化訓育及施設概要」「校舎の改築」「学友会」「雑記」とつづく（第一・二期も同様）。

さらに戦前に刊行された高商関係の校史としては、一九四二年の『大分高等商業学校二十年史』と四三年の『横浜高等商業学校二十年史』がある。前者の場合、校長森文三郎の「序」には「吾等は吾等の二十年の事蹟に鑑み取るべきを取り捨つべきを捨て現時局に相応せる教育方策を樹て且つ之を遅滞なく実施して行かねばならない」とあるものの、内容的には「沿革概要」「学事の変遷」「施設の推移」「諸団体の発展」という章の構成であり、戦時色は薄く、史・資料集に近い。

『横浜高等商業学校二十年史』の編纂は、校長の田尻常雄の提案による。田尻は「二十年の気魄に満ちたる伝統を基として、研学に教育に邁進すべき時期を迎へた」として、「国家が総力を挙げて大東亜建設の聖戦を遂行する秋、一刻の偷安も許されず」、「沈滞は学園の汚辱である」という奮起の源を、この編纂に求めている。ただし、ここでも構成は「一、総記 二、沿革 三、学友会記 四、同窓会記 五、回想録」という一般的な手法であり、戦時色は特に強くない。実質的な編纂は同校教授徳増栄太郎の手になり、史料収集も含めて三か月ほどで脱稿している。

おそらく小樽高商において校史編纂がもっとも具体化した創立三〇周年の時点で、先行する長崎と山口の各三〇年史が参考とされただろう。そして三〇年史としての編纂刊行が断念され、「三十五年史」へ事業が継続されていく過程では、後輩校である大分や横浜の各二〇年史も参照されたはずである（いずれも各校から寄贈され、図書館で所蔵）。

二 未完の「緑丘学園三十五年史」

1 「緑丘学園三十五年史」稿本の放棄

現在、図書館に「緑丘学園三十五年史」の稿本が所蔵されている。これまでの唯一の公式の校史『緑丘五十年史』（一九六一年刊行）の「編集後記」の冒頭には、この稿本に関して次のような記述がある（浜林正夫氏の執筆）。

学園の歴史をまとめようという企ては、これまで何回もあった。そのなかでもとくに創立三十五周年記念事業の一つとして企てられた学園史編集の仕事は、資料の収集を終わって執筆にかかり、数百枚の原稿を書きあげるところまですすんだのであるが、戦争末期から終戦にかけての時期にぶつかったため、ついに陽の目をみないで終わってしまった。五十周年を迎え、ようやく学園の歴史が世にできるようになったのは、こういう埋もれた先人の労苦があったからにほかならない。

『緑丘五十年史』の編集委員には、大野純一（前学長）と室谷賢治郎が加わっている。大野は前述のように二五年史と三〇年史の編纂委員であったから（室谷は二五年史の委員）、三〇年史の継続事業である「緑丘学園三十五年史」の編纂経過や稿本の存在について、何らかの情報提供があったと推測される。なお、大野自身がこの稿本の執筆に関わったかどうかは不明である。

同「資料一覧」では「緑丘学園三十五年史」について「昭和十八年ごろ執筆」とあり、「資料の収集を終わって執筆にかかり、数百枚の原稿を書きあげるところまですすんだ」という時点はおおよそ一九四三年中と思われる。ただし、稿本には一九四五年前半の記事も含まれており、原稿の加筆修正や点検は四五年まで継続されていた。創立三五周年は一九四六年秋の予定だったが、この稿本は「戦争末期から終戦にかけての時期にぶつかったため、ついに陽の目をみないで終わってしまった」。



生徒勤労働員と教育活動

生徒勤労働員・生徒出陣の事態に、学園（一九四四年に小樽経済専門学校へ転換）での教育・研究体制は実質的に停止状況となり、敗戦後は学生の民主化要求の運動が広がるなかで、苫米地校長の辞任という急転回もあった。新たに大野純一が校長となり、「我々は一日も早く学校を本来の姿にとり戻さねばならぬ。そして本当の学問研鑽の聖なる道場たらしめなければならない」（大野「学生諸君に望む」『緑丘』第一九九号、一九四六年六月二五日付）という決意の下、再建が図られていく。ちょうどこの再建スタートと軌を一にして、「商大昇格運動の烽火」が学内外からあがる。創立三五周年は、この気運を加速させることになった。

しかし、商大昇格運動にエネルギーをとられることになったため、また敗戦後一年余りの再建途上ということもあり、記念事業としては四六年一〇月五日の記念式典、十一月八日から一〇日の文化祭、『緑丘』第二〇一号（四六年一二月二五日付）の「創立三拾五周年記念特輯号」として

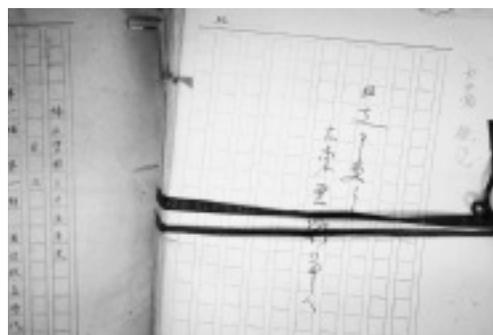
の発行、記念論文集『経済再建の諸問題』の刊行にとどまった。記念式典で大野校長は「希くは創立第三十五周年の記念日を契機として愈々校風の美を發揮しこれを小にしてはよく艱難に堪ふる鍊磨を積みこれを大にしては経済復興の一翼を荷ひ以て文化日本再建の大業に貢献せむとの決意を固めん」と述べる（『緑丘』第二〇一号）。

創立三〇周年からの継続事業として進められていた「緑丘学園三十五年史」編纂作業は敗戦とともに中断され、おそらく三五周年事業を具体的に構想する四六年春ころには正式に放棄されたと思われる。八月二二日、教官会議が召集され、日程や記念事業が正式に決まり、その直後の二八日付で室谷・高橋次郎らに「記念論文集編纂係」が発令されたが、三五年史編纂への言及はない（庶務係「通知綴」、一九四六年度）。

このように推測するのは、後述するように「緑丘学園三十五年史」稿本の内容に戦時色が色濃く投影されており、民主主義的・平和的な学園再建をめざすうえで不相当と判断されたとみるからである。その根拠となるのが、苫米地前校長の遷厩祝賀記念論文集の放棄の事例である。一九四四年六月以来、事業委員会で寄付金募集などを展開してきていたが、「記念論文集の刊行は終戦に伴ふ情勢の急変から原稿の内容も不相当なもの」となったことを理由の一つとして、断念放棄された（『緑丘』第二〇〇号、四六年一〇月二五日付、なお、このとき肖像画は二枚作成され、一枚は苫米地に献呈、一枚は現在大学が所蔵するものである）。

2 「緑丘学園三十五年史」解題

「緑丘学園三十五年史」稿本は、市販の四〇〇字詰原稿用紙（一部に「記念論文用原稿用紙」を使用）にペンで書かれている。筆跡は数名におよび、編・章ごとに分担して執筆したことがわかる。前述したように、三〇年史編纂委員として「卜部、大野、松尾、佐々木の諸教授」が指名されており、まもなく退職する卜部岩太郎を除く大野純一・松尾正路・佐々木一義による執筆と考えるのが順当である（佐々木は四四年四月に久留米工専に転出



「緑丘学園三十五年史」原稿

し、大野は四四年一月から再度の応召となる）。大野は一九二二年に、松尾は二九年に、佐々木は三九年にそれぞれ赴任していた。後述する第十章「雑記」中の「校旗由来」に佐々木の名前が見えるほかは、執筆者の署名はない。他の執筆者として南亮三郎・室谷賢治郎・高橋次郎らが加わった可能性もあるが、決め手はない。

表紙に相当するものはなく、「緑丘学園三十五年史 目次」と題したものがあ

第一編 第一期 渡辺校長時代

- 第一章 創立まで
- 第二章 創立当時
- 第三章 皇室関係事項
- 第四章 規則及細則
- 第五章 教職員の任免及異動
- 第六章 教科訓育及施設概要
- 第七章 生徒関係事項
- 第八章 校友会
- 第九章 同窓会
- 第十章 雑記

第二編 第二期 伴校長時代

- 第一章 皇室関係事項
- 第二章 式典
- 第三章 諸規則の改正
- 第四章 教職員の任免及異動
- 第五章 教科訓育及施設概要
- 第六章 生徒関係事項
- 第七章 校舎の改築
- 第八章 校友会
- 第九章 雑記
- 第十章 対外活動

第三編 第三期 苫米地校長時代

- 第一章 第三期概況
- 第二章 皇室関係事項
- 第三章 諸規則の改正
- 第四章 教職員の任免及異動
- 第五章 教科訓育及施設概要
- 第六章 勤労作業
- 第七章 生徒関係事項
- 第八章 校舎の改築
- 第九章 校友会
- 第十章 雑記

ただし、実際の稿本の構成はこれらとかなり異動があるので、主な部分に限り、次に掲げる。

第一篇 沿革篇

第一章 創立以前

第一項 我が国商業教育の変遷概観

第二項 本校創設に関する経緯

第二章 創基礎時代

第一項 創立校長と其の経緯

第三章 皇室関係事項

第一期

第二期

第三期

第四章 規則及細則（諸規則）

第一期

第二期

学事報告 第一期

小樽高等商業学校規程（明治四四年）

第五章 教職員の任免及異動

第一期

第二期

第三期

第六章 教科訓育及施設概要

第一期 寄宿舎 修学旅行

第二期 修学旅行 山上グラウンド 指導教官制度

第三期 修学旅行 オリンピック出場 興亜学生勤労報国際隊（昭和十五年度）

組主任制度 研究室並びに学生会館 健民修練ほか

第七章 生徒関係事項

第一期

第二期

第三期

（第八章 欠）

第九章 対外活動 産業調査会から北方経済研究所まで

第一期 産業調査会略則

第二期 成人教育講座 小樽公民会沿革

第三期 北方経済研究所新発足

第二期 第二章 式典

- 創立十周年記念式
- 二十周年祝賀記念式
- 創立二十五周年記念祝賀式
- 三十周年記念式

第三期 概況 日支事変より大東亜戦争へ

- 学生新聞『緑丘』からの抜粋記事
- 小樽高等商業学校規則(昭和十七年)
- 高等商業学校標準教授要綱
- 小樽高等商業学校教育概況(昭和十八年十月)
- 専門学校修練指導要綱(案)(昭和十八年十一月)

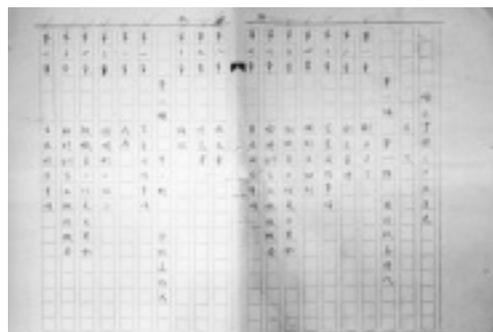
第三期 第六章 勤労作業

- (勤労日誌)
- 小樽高等商業学校精動強化委員会設立案
- 国民精神総動員健康週間実施案
- 小樽経済専門学校規則(昭和十九年四月実施)

第十章 雑記

- 名士の来校と講演
- 大西猪之介教授永眠
- 奨学資金
- 学生新聞『緑丘』からの抜粋記事

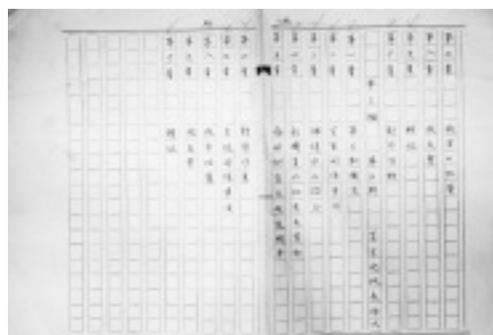
「目次」構成のうち大部分の章の上にチェック印が付けられ、おおよその原稿が集まったことを示すが、第一編第二章の「創立当時」、第二編と第三編の各「校舎の改築」「校友会」についてはチェック印がなく、原稿ができていなかったと推測される。実際に稿本には、それらに関する原稿は残されていない(第一編第八章の「校友会」と第九章



目次1枚目

の「同窓会」の原稿もない。

史料収集と執筆の作業においては、「皇室関係事項」「規則及細則」「教職員の任免及異動」などの大きな章の主題ごとに数名で分担されたと推測される。現在残る稿本では章ごとにまとめられ、それぞれのなかに第一期から第三期までがつづいて叙述されている。したがって、「目次」で予定された構成とするためには、稿本を各期に分解し、再整理する必要がある。総じてまだ稿本の完成度は



目次 2 枚目

低く、第一稿というおもむきである。戦時下の倉皇とした状況下、教員も学徒勤労動員を引率指導し、学園を離れることも多く、落ち着いた研究教育生活は送れず、年史編纂のための史料収集や執筆に臨む十分な態勢がとれなかったことは想像に難くない。

四つのことを指摘しよう。第一に、渡辺・伴・苦米地という三校長の在任期間に対応した時期区分（編）をとっていることである。このスタイルは、『緑丘五十年史』、さらに小樽高商史研究会編『小樽高商の人々』、「小樽高商小樽商大九〇周年展」（二〇〇一年開催）・学内「大学史料展示室」（二〇〇三年開設）の構成でも、そのまま踏襲している。それは安易な踏襲ではなく、各校長の個性と時代状況が照応し、その一〇年前後の在任期間が「緑丘史」のかなり鮮明な区切りとなっているということからの必然的な結果である。同時代を「緑丘」で過ぎてきた教職員にとって、この時期区分は各校長の個性と相まって実感としても感じられたことであろう。

第二に、稿本を見る限り、全体として基本史料の集成というべき内容となっていることである。このまま完成したとすれば、前述した『大分高等商業学校二十年史』（一九四二年）に近いものになったのではなからうか。それは「規則及細則」「教職員の任免及異動」「教科訓育及施設概要」「生徒関係事項」「校友会」「同窓会」「雑記」などという構成を採用した時点で方向づけされたともいえるが、同時に戦時下末期の段階での編纂作業の限界でもあった。それでも、第一編冒頭の「第一章 創立以前」と「第二章 創基礎礎時代」の前半は史料を読み込んだうえでの本文叙述となっており、戦時下という制約がなく、万全な編纂態勢が整えば、「本校々制の淵源と変遷とを究明し、学規教則及教育方針を闡明すると共に、学園生活の全貌を考察して多年の伝統を明かならしめんとした」という『山口高等商業学校沿革史』に迫る充実した「三十五年史」になったかもしれない。

第三は、「皇室関係事項」の比重の大きさである。三期合わせたかたちの稿本では原稿用紙七〇枚余となり、先行する『山口高等商業学校沿革史』（一九四〇年）、『大分高等商業学校二十年史』（一九四二年）、『横浜高等商業学校二十年史』（一九四三年）と比べても格段に多い。天皇の行幸と皇太子の二度の行啓があったことに加え、戦時下末期の編纂ということがこの多さの理由であるが、そのことが戦後直後の「創立三十五年史」としての刊行を困難にさせたと考えられる。最

初の記載は、開校直後(一九一一年)の「五月十一日 御親署の教育に関する勅語を下賜される」である。一九三六年一〇月の昭和天皇行幸についての稿本の叙述から小見出しを拾ってみよう。

小樽御臨幸 本校御臨幸 入御 拝謁を賜ふ 校務奏上 剣道野仕合天覧遊ばさる
校内御巡覧 御少憩 還御 御召艦御出港

苫米地校長による「校務奏上」には、次のような一節がある。

本校教育ノ方針ハ常ニ「教育ニ関スル勅語」ノ御趣旨ヲ奉戴シテ、専ラ人格ノ養成ニ意ヲ注
ギ、世界ニ比類ナキ我が国体ノ精華ヲ発揚センコトヲ努メ、商業実務ニ関スル知識、技能ノ
涵養ヲ図ルト共ニ体育並ニ武道ヲ奨励シテ、身体ノ鍛錬ト剛健ナル気風ノ振作トニ留意致シ
マシテ、産業ヲ通ジテ皇国ニ奉仕セントスル精神ヲ扶植スルコトヲ期シテ居リマス。

そして最後は「今日畏クモ御臨幸ヲ仰ギ、本校ノ教育一般ニ就テ天覧ヲ賜ハルノ光栄ニ浴シマ
スルコトハ、臣等一同ノ恐懼感激ニ堪ヘナイ所デ御座イマス。爾後益益奮闘努力シテ一層其ノ本
分ヲ尽シ、匪躬ノ節ヲ致シテ洪大無辺ナル聖恩ノ万分ノ一ニ応ヘ奉ランコトヲ期シテ居ル次第
御座イマス」と結ばれる。

第四は、当然とはいえ、この編纂段階を含む第三期、つまり苫米地校長期の叙述が多くなり、
全体として戦時色が強くなっていることである。第三期「概況」は、「大学専門の学生生徒 在学
卒業年限短縮」「国難に殉ぜん学徒の決意 戦捷祈願」と、新聞『緑丘』の記事から転載が並ぶ。

第三期第六章の「勤労作業」は、一九三八年六月からの日誌の記載である。作業開始となった
七月一四日の条は、「花園公園に於て勤労作業を始む。第四道場は迎賓館前、第三道場はグラウン
ド、而して第一、第二道場は小学校裏手の松林に於て夫々午后四時過ぎ迄作業を続く」となっ
ている(「道場」は寮のこと)。一九四一年七月には、報国隊として八雲部隊・千歳部隊・女満別部
隊・小樽部隊が出動していることがわかる。

3 「緑丘学園三十五年史」の意義

創立二五年、三〇年の二度の編纂計画の頓挫を経て、ようやく「三十五年史」として編纂作業
が進捗をみながらも未完に終わった「緑丘学園三十五年史」の意義はどこに求められるだろうか。

残念ながらこの「三十五年史」自体には編纂の趣旨や意義についての論及はないが、叙述を「我
が国商業教育の変遷概観」から始め、第二章を「創基礎時代」とするように、「本校教育ノ目標」
— 三〇周年時点での「時勢ノ進運ニ応ジ、国体信念ノ確立ト人格陶冶ヲ経トシ、学理ノ實際化、
地方化ヲ緯トシ、産業報国ニ帰結シ、以テ臣道ニ徹底シタ実業人タラシムベク錬成スルコト」と
いう苫米地校長の発言 — とその実際上の運営の経緯の確認にあったことは間違いないだろう。
その意味で「緑丘学園三十五年史」編纂の試みは、「本校は専門学校として商業教育の最高学府で
ある」(第二章第一項 創立校長と其の経綸)ことをめざした小樽高商の未完の自画像といえる。

第一稿ともいべき段階でとどまってしまったため、不十分な点が多いことは否めない。たと
えば、「学事報告」(一九一三年から二一年、卒業式での報告)や「教育概況」(一九四三年)など

によって全般的な状況は概観できるものの、「最高商業教育たるに相応しい特色ある智識技能」（第二章第一項 創立校長と其の経綸）を授ける「商業実践」「企業実践」「商品実験」などについては具体的な叙述がなされていない。また、教員の研究状況や学生のご生活ぶりなどへの言及も乏しい。そうした物足りなさはあるものの、回顧するには十分な三〇年余りの小樽高商の歩みをオーソドックスな手法で検証しようとした最初の試みとして、第一に記憶されるべきであり、年史編纂の構想や方法について批判的に摂取されるべきものである。これらの「先人の労苦」を糧として『緑丘五十年史』の編纂がなされたのであり、さらに来るべき『百年史』の編纂も可能となる。

年史編纂の構想や方法の批判的な摂取とともに、この「緑丘学園三十五年史」稿本が『百年史』編纂への直接的な寄与・貢献となってくれるのはその豊富な史料群によってである。すでに「緑丘学園三十五年史」編纂に活用された史料群のかなりの部分は散逸しており、第一次史料ではなく引用された第二次史料という制約はあるとはいえ、それらによって知りうる新たな知見は多い。

いくつか例を引くと、第四章（第一期）の「選科生收容ノ理由」はその一つである。一九一三年三月の規則改正による選科生制度は、「東京以東ノ唯一ノ商業専門教育ヲ授ル本校ハ出来得ル限り設備ヲ利用シ斯学修得ノ希望者ヲ收容シ學術普及」に努める、という趣旨であったことがわかる。

一九三九年四月から実施の中国語を第一外国語とする「語学乙類」設置についての史料も注目される。その「改正理由書」には、「満洲北支方面」への卒業生就職者が約三〇名あり、「差当リテ支那語教授ノ施設ヲ拡充シテ以テ卒業後彼地ニ於テ活躍セントスル志望確實ナル者ノ勉学ニ資セントス」とある。稿本に収録された「乙類昭和十五年度実施予定学科課程表」によれば、「東亜経済史」「東亜経済地理」が新設されている（既設置科目には「満洲国支那法制」「東亜経済政策」がある）。

勤労働員が増大すればするほど、通常の授業の実施は困難になり、一九四四年度から応急的な対応策がとられた。「在学期間ヲ四期ニ分チ各期ニツキー一応ノ教育完結ヲ図ル」というもので、たとえば、「第二期」は「三十一週 各科目ノ総論、基礎的部分」をあつかう。稿本には各期別の集中科目表が収録されている。

第六章の「修学旅行」は三期全般にわたる叙述となっている。開校後まもなくから海外の修学旅行は実施されていたが、一九一七年六月二六日出発の場合は次のような行程であった。

第三学年修学旅行隊五十九名 苫米地教授石橋助教授引率にて本日午前十時三十分大阪商船会社交通丸に搭乗、露領浦塩斯徳に向ふ。哈爾賓、奉天、大連、新義、京城、釜山を経て瀬戸内海より神戸に到る。

一九二二年五月の記事——「中村主事修学旅行の一として弁論部講演旅行隊を引率、下富良野、帯広、釧路、網走、野付牛、名寄各地へ七日間の予定を以て出発す」——は、巡回講演が修学旅行の一環としてなされていたことを示して興味深い。一九三一年には六方面に向っており、日程と

費用概算がわかる。

「満支方面」	日程二四日	費用概算一四〇円
樺太方面	七日	三七円
関西方面	九日	三九円
関東方面	不明	不明
室蘭方面	五日	一八円五〇銭
釧路方面	六日	三〇円

一九三〇年代後半の修学旅行は戦時色が強まる。三五年六月には「生徒をして軍隊生活を体験せしむる為短期間の軍隊宿泊を実施」し、以後、「年中行事の一つとなつた」。三七年には「満洲派遣学徒見学団」「満洲派遣学徒勤労実習団」各二名のほか、「満洲修学旅行団」として四七名が七月に出発している。そして、極めつけは全国の大学・高専で実施された「興亜青年勤労報国隊」で、一九三九年には小樽高商からは五名が参加する（そのなかには、後年特攻死を遂げる道場七郎がいる）。「緑丘学園三十五年史」稿本には、四〇年の「北支派遣隊活動状況報告」が収録されている。

一九四三年七月に実施された「健民修鍊」については詳細な記述がある。体力的に「要修鍊」とされた学生に対して、「国防上産業上国家ノ要請スル直ニ剛健ナル心身ノ保有者タラシムル」ために夏休みに二週間余の合宿生活をさせるもので、一日の休みもなく柔剣道・水泳・「行軍」などがおこなわれた。

第二期第九章「対外活動」として取りあげられる「成人教育講座」の叙述も貴重である。「教育の事業は唯に学校施設のみを以てしては不十分であり、生涯の事業たるべきものであるとの理念」に立って、文部省の委嘱により、小樽高商でも一九二五年から実施する。一九四四年までの継続的な実施は全国的にみても珍しく、しかもこれらの聴講者である市民と恒常的に連携する「小樽公民会」も創立・運営されていた。稿本には各年の講座名のほか、「小樽公民会沿革」も収録されている。

第十章「雑記」中には、「大西猪之助教授永眠」や「校旗由来」の記事が収録されている。後者によれば、一九三六年に作成された校旗の「白地ハ純潔法浄及明朗等ノ我が国民性ヲ意味」し、「此ノ上ニ本校教育綱領タル「国体信念ノ確立」ヲ教育ノ大精神トナセルコトヲ表章ス」という。

また、新聞『緑丘』からの転載も多く、なかには現在所蔵が確認されていない一九四五年一月二五日付の『緑丘』（「白雪皚々の緑ヶ丘に学校分会遅しく発足す」）記事も含まれる。

「緑丘学園三十五年史」稿本を構成する史料群は、『百年史』編纂の直接的な素材となり、いくつかは資料集に収録されることになる。

〔史料抜粋〕

第一篇 沿革篇 第一章 創立以前

第二項 本校創設に関する経緯

明治二十七・八年日清戦役後、欧米列強は我が国の実力を認識して、従来国辱とも見らるべき片務条約改訂の機運に向ひ、同三十二年改正条約の実施と共に治外法権等に税権の撤廃諮問書が来たので、時の小樽の委員会は将来外国人の多数が住居するやうな枢要の地に高等商業学校の必要ある所以を述べ、併せて我が小樽に於ても先づ其の設置を要望する旨をも答申した。これと前後して法制局長官平田東助氏来道し、函館居留地の永代借地権に就て調査せられるに当り、小樽市にも立寄られし際、当地に高等商業学校設置の希望を陳情したことがあつた。

明治三十七・八年の頃北海道第二部（学務部）長原元一氏は時の長官園田安賢男の旨を受け道会議員の有志者と協調し、戦後の経営として中等教員七ヶ年計画を立て本道の枢要地に各種中等学校の設置を図ると共に一面、国の施設として札幌農学校を大学に昇格し、これに土木科水産科等の専門部の併置を以てし、更に高等商業学校、高等工業学校等の専門学校を新設せらるゝ案を齎らして猛運動を開始し、本道出身代議士、道会議員は勿論、道庁側では園田長官を始め大塚第一部長、湯原第二部長等相次いで上京して政府に迫つた。當時は西園寺内閣で、内務大臣原敬氏文部大臣牧野伸顯氏文部次官沢柳政太郎氏の方々で何れも同情を以てこの案に対せられた。もと本案は北海道の開発方針より出でたもので、一は本道の拓殖経営を進捗せしむると同時に一は精神方面より文化の普及を図り以て全面的に北海道の発展を期したものであつた。然るに前者は政府の容るゝ所とならなかつたが後者は有利に展開して行つた。果然明治三十九年に至り文部省は高等商業学校の新設を認むることゝなつたので、小樽区は之を誘致する為に一万坪の敷地と校舎建築資金五万円を寄付することに腹を決めて居つた。処が同年十月頃上京中の区長椿原泰一郎氏代議士金子元三郎氏区会議員篠田治助氏等から飛電あり、戦後の国費多端の折柄であるにより小樽への設置を要望するならば敷地の外に建設費二拾万円を寄付するや否やの問交渉があつた。至急回答せよとのこと、当時本市に在つた有力者とし寺田省躬、渡辺兵四郎、小町谷純の諸氏鳩首協議の結果応諾の旨を返電する等の曲折を経て新設運動は順調に進捗した。

斯くして明治四十年の第二十四回帝国議会に於て文部省は第五高等商業学校設立の予算を提出し、終に可決せられ、次いで本校が小樽に出現することに内定した。然るに敷地に就て問題が起つた。有力なる候補地として、最上町の天狗山麓の緩傾斜地、長橋の坂本町、及現在の緑町の地等を提供したが、本省より書記官来樽し検分したる結果、一は松ヶ枝町遊廓に近接して居るから宜しくない、二は市の中央より余り遠距離の地なるが故に不便である等の理由で其の選に漏れ、終に現地の緑丘山腹の傾斜地をトして設置することに定まり三箇年の継続事業として経営の歩を進め、同四十一年五月十日先づ敷地の地均工事に着手し、同年十月七日校舎の建築に取りかゝり、同四十三年二月一六日竣工し茲に始めて多年要望せられし経済文化の源泉が現はるゝに至つた。同年三月二十七日勅令第六十六号を以て文部省直轄諸学校官制改正、小樽高等商業学校の名称が追加せられ、同日勅令第六十七号により本校職員の定員が定められた。翌四十四年一月二十六日

東京高等師範学校教授渡辺龍聖氏が本校校長に任命せられ、緑丘学園の基礎が据えられた。

〔追記〕

この「経緯」に関する前半の叙述のなかで、平田東助来道の際の小樽区民による「高等商業学校設置の希望」の陳情、日露戦後経営のなかで北海道庁による中等・高等教育機関の整備構想については、今後の究明すべき課題である。